

## 小児科外来における不登校の子どもたちへの援助

高柳滋治 (北海道)

**要旨:** 様々な方策がとられているにもかかわらず、現在も、不登校の子どもたちが一定の割合で存在しています。今あらためて、アドラー心理学の思想と理論に沿った、不登校の子どもたちへの援助の方略が求められているものと思われます。筆者は、小児科外来において、アドラー心理学に基づいた不登校の子どもたちとその親の相談を受けてきました。①親自身の援助力を取り戻すこと ②子どもの社会的な訓練を始めること の2点を援助のための大きな柱とし、当面学校に行かないことを受け入れつつ、子どもと親を勇気づけ、もし学校に行くのなら、子ども自身が、「将来ちゃんとした大人になるために、大変なこともあるけど、学校に行って自分を訓練しよう」と思えるように、また、もし学校に行かないなら、「学校とは別に、自分にあった訓練の場を見つけよう」と考えられるように援助をしてきました。具体的な援助のやり取りを交えつつ、不登校をきっかけに、子どもたちが、他者に対して関わりを持ち、この社会に対して責任を持つようとし、貢献して暮らそうと考えられるように成長していくための援助について考察します。

(なお、この文章は、2018年10月石川県能登で行われた第35回日本アドラー心理学会総会にて報告した「小児科外来における不登校の子どもへの援助」を加筆修正したものです。)

**キーワード:** アドラー心理学、不登校、勇気づけ、カウンセリング、親の援助力、社会訓練の場、責任と貢献

### I. はじめに

日本では、小・中学生の不登校は、平成29年(2017年)度に過去最多となる14万4031人(1.4%)と報告されました。平成9年度(1997年)に10万人を超えて以来、同じような水準で経過しています。当クリニックの外来にも、不登校を心配する保護者が子どもを連れてやってきます。

平成28年に、文部科学省は、「不登校児童生徒への支援のあり方について」という文章を出しています。それには、

「不登校児童生徒への支援は、

『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。

また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること」<sup>(1)</sup>

と書かれています。日常的に、不登校の親子を援助している立場からすると、文章的にはまさに

その通り。もし、この通りに現場で実践されていれば、現在の不登校問題はもう少し改善しているであろうと思われます。この目標を言葉だけに終わらせず、いかに現場で具体化していくのが問題なのだと思います。

アドラー心理学には、この目標を具体化するだけの力があると思っています。では、実際にどんなふうに相談を進めていくのか、当クリニックでの相談の実際を交えながら、報告していこうと思います。

## II. 我が家の不登校

我が家には二人の子どもがいます。二人とも、小学校からの不登校児でした。

息子は、小学校に入学した当初から行きしぶりがありました。周囲から、「甘やかして育てたから、学校に行けなくなったんだ」などと指摘を受け、あれこれ悩んだ末に、アドラー心理学に出会うことができました。スマイルを受講し、親がそんなにあせらなくてもいいことを学び、学校に行かないわが子を受け入れるようにしようと思いました。

2年後に、娘が小学校に上がりました。当初は休まずに通っていましたが、次第に緊張するようになり、三学期から学校に行くのをやめました。このときはすでにアドラー心理学を学び始めていたので、学校に行くことを強制しませんでした。

子どもたちは、先生や友達の働きかけで、少し行ってみたり、また休んだり、学期や学年が変わる時に様子見にしばらく行って、また休んだり、自分のペースで行ったり行かなかったりが続けていました。

息子が3年生になったとき、担任の先生と相性があい、毎日学校へ行くようになりました。トンネルの出口がみえたかに思っていました。5年生になって、担任の先生が変わったとたんにまた行かなくなりました。

このころから、学校に行く、行かないで一喜一憂するのではなく、そもそもこの子たちは学校に合わないのではないのか？ この子たちが学校に行かないで大人になるということを実際に考えなければならぬのではないのか？ と思いはじめました。学校に行かないことに腹をくくると、すべきことは学校以外の場所に子どもが学び成長できる場を用意することだということが見えてきました。

子どもたちは、学校に行かない間も、学童保育には行っていました。学童保育には生活があります。異年齢で、一緒になって遊び、おやつを用意をし、片づけや掃除をし、さまざまな行事をこなし、上級生が下級生を助け、下級生は上級生にあこがれるというよい意味での共同体的な生活を送っていました。学童保育での子どもたちの姿を見て、遊びや生活の中にこそ、子どもの成長の原動力があるということを実感しました。

それをモデルに、さまざまな人の協力を得て、不登校の子どもたちの居場所「フリースペース自由高原」を立ち上げました。1999年のことです。同じ不登校の子どもたち同士、気兼ねなく付き合う中で、子どもたちも元気になっていきます。また、わが子が、親以外の他人と、きちんと関係を作り、やり取りする姿を見ることができて、親として安心することができました。二人とも自由高原に通ううちに、自分で自分の道を考え、選択するようになりました。高校に上がるとき、上の息子は定時制高校、下の娘は通信制高校を選びました。

私たちが、不登校の親を卒業できたのは、フリースペース自由高原を作ったからだと思っています。

ます。子どもたちが、人と出会い、出来事と出会いながら、学び、成長する場所が、学校以外にもあるのだということを知りました。

学校に行っても行かなくても、子どもたちは年を取り大人になっていきます。その時に問題になるのは、一人の社会人として、この社会に貢献できる人になれるのかどうかということです。ちゃんとした大人になるのに、自然成長に任せてよいわけではありません。学校に行かない選択をするのなら、学校以外に、学び、成長する場を持つべきです。「学校をやめるのは、学校に行く以上に貢献できる生きかたがあるとき。先の目標なくして、受け入れるのはアナーキーだ。」<sup>(2)</sup> これは、2006年の埼玉総会のシンポジウム「もう一度育児を考える」の準備のときに、野田先生から受けたアドバイスです。今もこれを肝に銘じています。

息子が4度目の高校1年生の途中で、学校をやめたいと言ってきたとき、家族会議を開いて、「高校を辞めるなら、代わりに何をするのか」を話し合いました。「管理栄養士になりたい」という夢を親子で共有し、大学進学を目指し、高校卒業程度認定試験を受けることにしました。2ヶ月の集中勉強で一発で合格、その勢いで大学にも合格したことが印象に残っています。

### III. 相談外来の実際

現在、クリニックでは、予約制で「相談外来」というのを設けています。週3回、午前の一般外来が終わった12時から、30分から50分時間をとって、相談に入ってもらいます。不登校の相談が多いのですが、心身症、発達障害、チック、夜尿、肥満など少し時間のかかる相談ごとにも対応しています。

小児科外来で、不登校相談を受けるのは、いくつか利点があります。小児科の外来は、ふだんかぜなどの病気で気軽に受診できる場所なので、精神科や教育センターなどに比べて、敷居が低く相談しやすいと思います。

身体的な訴えに対して検査をし、異常のないことが確認できると、安心して心理的な問題に絞って相談に乗ることができます。

0歳から思春期までかかることができるので、長期的な見通しを持ったかわりができます。小さいころから見ていたお子さんであれば、成長の様子を見ていたり、家庭的な背景を見ることができたり、すでに親との間に信頼関係ができていたりします。

小児科での相談だけでは解決しない事例もあります。たとえば、発達障害に関わることです。自閉スペクトラム症の子どもたちの中には、学校が苦手な子がいます。ほかの子どもたちとうまくつきあえず、そのために、学校に行くことが苦痛になります。担任や特別支援コーディネーター、管理職の先生方と、その子の特性にあわせた配慮についてお話しする必要があります。相談中のお子さんのことでコーディネーターの先生とつながり、発達障害の診断を受ける前に、特別支援教室に移ることができ、元気に学校に通うようになったお子さんもいます。

発達障害の診断があると、学校の理解がよりよく進みます。保護者の方と相談して、発達障害を診断できる専門医のいる地域療育センターに紹介することもあります。

小児科で関わりきれないケースとして、不眠や強迫症状が強く、内服が必要な場合に、精神科を紹介することがあります。親が精神科の受診を希望するケースもあります。

地域のフリースクールや適応指導教室との連携も必要になることがあります。こちらから、フ

リースクール・適応指導教室を紹介したり、フリースクールに通う日数を増やすかどうかの相談を受けたりもしています。

#### IV. 不登校援助の方略

##### 1. 不登校に対する援助戦略

援助の戦略については、まず、大きな柱として

<1>親自身の援助力を取り戻すこと

<2>子どもの社会的な訓練を始めること

の二つを考えています。

実際の相談の中では、社会的な訓練をすることを通して親の自信も回復していくので、この二つは同時に進行していきます。

##### 2. 不登校に関して何を問題すべきか？

当時の私もそうでしたが、保護者の方が一番気にしているのは、「学校に行かせるのか？行かせないのか？」ということです。しかし、問題の所在は、「学校に行くのか、行かないのか」ではなく、「学校に行って何をするのか？」にあります。

なぜ、私たちは子どもたちを学校に通わせるのでしょうか？ それは、将来大人になって、人々に役に立つ人間になってもらうために、学校で社会的な訓練を受ける必要があると思っているからです。

したがって、もし学校に行くのなら、子ども自身が、「将来ちゃんとした大人になるために、大変なこともあるけど、学校に行って自分を訓練しよう」と思えるようになることが大切です。また、もし学校に行かないなら、「学校とは別に、自分にあった訓練の場を見つけよう」と考えられることが必要です。

##### 3. 親の援助力を回復する

そうはいつても、親は悩みます。なぜ親は悩むのでしょうか？ 多くの親は、「学校へ行くのは当たり前」と思っています。それなのに、学校に行こうとしないわが子を見て、「ちゃんとした大人になれるのだろうか？」「どこかおかしいのじゃないか？」あるいは「自分の子育てが間違っていたのか？」と悩んでしまったりします。

アドラー心理学では、人は社会的な存在であり、常に所属に向かう力を持っていると考えています。この場合の所属は、「この社会に対して、自分はちゃんと役割を果たしているという感覚」です。それが、人というものが前向きに生きるための原動力です。人は、所属を満足するときに精神的に健康になり、所属を満足できないと感じた時に悩みを抱えることになります。

親が悩むのは、社会に対する責任を果たしていないのでは？ という親としての劣等感です。親としての所属の危機と言ってもよいと思います。「学校に行けるようになるまでひたすら待つべきだ」という意見もあります。しかし、親として「何もしないでいる」ことはできません。特に、こうやって相談に来る親には、潜在的に「親として私にできることはあるのか？」というニーズがあると言えます。

そこで、親と援助者の間で、目標を一致させることができます。大きな目標を「大人になって

からの社会的な自立」におきます。この目標に向けて今何をするのか？学校に行かないのなら、家で何をして過ごすのか？ということ話し合います。親として今できることが見つかり、親も元気になり、援助力を回復していくことができます。

#### 4. 社会的な訓練をはじめ

学校に行っていない子どもたちも所属の危機にいます。「学校に行かない自分はだめな人間だ。ちゃんと役割をはたしていない」と感じています。それゆえ、「大人になってからの社会的な自立」を目標におき、それに向かって今何をするのかを話しあうことは、子どもにも受け入れやすい提案です。

学校に行かない間に何をして過ごすのか？それを明らかにするために、まず大人になって何をするのか？を一緒に考えます。どんな職業に就きたいのかを聞きます。決まっていなければ、子どもの得意なこと、好きなことを聞き、一緒に考えます。具体的な職業をいくつか絞ることができれば、それに向かって、今なにが必要なのかを考えることができます。

家で勉強する、お菓子を作る、工作をする、体力づくりをする、自分の興味にそった調べものをする。職業に関連した学習や見学、疑似体験、可能であれば職業体験もしてモチベーションを高めてもらいます。

具体的な職業をイメージできない場合は、おおまかな方向性を考えます。学校に行けない子どもの多くは対人関係が苦手です。その反対に、課題への取り組みは得意です。たくさんの人と器用につきあっていくという一般的な仕事のイメージではなく、手に職をもち、共通の関心ごとを持つ少数の人と付き合う、いわゆる職人をイメージしてもらいます。

それでも、はっきりと意識できないときは、相当劣等感が強い状態にあると考えます。まず、家にいてくつろぐことを目標にします。こちらから、「学校に行くことの意味」についてお話しし、焦らなくてもよいこと、当面はお休みすることを提案します。また、親にも学校に行かない子どもを受け入れるようにお話しします。そのうえで、食べること、遊ぶこと、働くこと、毎日の生活の質を向上させる工夫をします。

子どもたちが、家の仕事をするのはとても大切なことだと思っています。家の仕事は、①達成感を得られると同時に、家族に感謝されるので、自分への自信を高めることができます。また、②計画し、準備し、一つずつこなしていくという仕事の段取りを訓練することでもあります。そして、③他者に感謝される経験を通して、他者に貢献して生きていこうという動機づけにもつながります。

子どもたちに、学校に行かなくても家の仕事はしてもらえるように勇気づけます。「学校に行かないでいるとひまじゃない？」と聞くと、たいてい「ひまだ」と答えます。中には、家の仕事を積極的に引きうけていたり、勉強をしっかりとやっていたりする子どももいますが、たいていは、ゲームやテレビ、漫画などの受動的な活動をしています。そこで、「少し家の仕事をしてみない？」と誘います。「家の仕事をしていると学校にいけない罪悪感を減らすことができるし、だんだん心のエネルギーもたまっていくよ」と親にも子どもにも説明し、「家族みんなで助け合って暮らしていくのってすてきじゃない？」と聞くと、たいていのお子さんは了承してくれます。

## V. 事例に沿って

ここから実際の事例に即して、具体的な援助について考えていきます。この事例は、親御さん

と本人の了解を取っています。一部、特定できないように改変しています。  
(以下、医：医師、子：本人、母：母親)

<初回受診>

初めて小児科外来に来院したときのお話です。

☆本人の意思を聞く

いろいろと状況をうかがった後で・・・

医：それで、当面お休みをすることにして、いつかは行く？

子：行く。

医：本当？ まわりのみんなが行けって言うから？

子：自分で決めて行く。

医：それはすてき。学校は何するところと思う？

子：勉強するところ。

医：そうね、じゃあ、家で勉強できれば学校行かなくてもいいと思うけど、どう思う？

子：・・・

医：将来何になりたいですか？

子：野球の選手。

医：あ、それなら大丈夫だ。野球はチームワークだからね。あんまりごちゃごちゃなくていいよね。学校ってごちゃごちゃしてるんですよ。やりづらいでしょう？

子：・・・(苦笑)

医：学校は、行かなくちゃいけないところじゃないと思うの。学校は上手に付き合うところ。自分にとってやっぱり必要だなと思えば行けばいいんです。ゆっくり考えていいと思います。

本人の行く意思がどれくらいあるのかを聞いてみます。必要以上に頑張っているときは、少しガス抜きをする必要もあります。

☆行かせるのか否か？

母：学校に行くって行ったらおなかが痛くなるから、行かなくてもいいと言った方がいいんじゃないか？

医：どうでしょうね。行かなくていいわけでもないでしょう？ どう？

子：・・・

医：行くなら行くでいいんです。今日は行く？って、自分で体に聞いてみたらどうでしょうか？ 行けそうなら行く、行けそうになればお休みする。

子：・・・

医：自分で決めていいんですよ。じゃあ、まず今日は検査ね。

母の対応の基本について、学校に行くのかどうかは本人が考えるべき課題なので、本人に決めてもらうようにお話しします。体調の不良は、心理的なものと考えられるが、念のため、身体的な問題がないか検査もします。

< 1 回目の相談外来 >

約一か月後の相談外来です。子どもの前では充分お話しできないこともあるので、一度分かれて母のみでお話しします。

☆母の心配事

医：今のお母さんの心配事ってどんなことですか？

母：やっぱり、みんなとのかかわり方、コミュニケーション的なものも必要だと思うんです。家にいるだけではどうしてもそういうのはできないので。

医：なんで人とかかわり方の訓練が必要なんでしょう？

母：うーん…打たれ弱いところがあるので、いやなことも経験して強くなってほしい。

医：なるほど、そのあたりが心配なんだ。集団が苦手な大人っていると思うんですよ。学校は30, 40人、そういう人と付き合うのは大変ですよ。あなた自身はどうですか？

母：一人でいるのも好きです。少数の人とつきあうのがいいです。

医：安心して付き合える人数は、人によって違うと思うんです。4, 5人くらいのところならお母さんは大丈夫なんですよ。彼はどうですか？

母：今は、遊びに来るお友達は、一人限定です。

医：そういう子を30人、40人のところに無理にだすと元気になるか、ますます引きこもるようになるか、どっちだと思います。

母：えー

医：営業マンのように、広く浅く付き合うタイプと、陶芸家みたいに、狭く深く付き合うタイプとあると思うんです。たとえば、野球の選手なら、周りは野球好きばかりでしょう。そういう中ではやっていけそうに思うんだけど。

学校に行けないことが、母にとってどんな風に心配なのかを聞きます。同じ不登校でも、何を心配しているのかは、一人一人微妙に違います。クライアントである母の思いに沿って、目標の一致をするために丁寧に聞いていきます。

☆学校が必要な理由

医：学校が子どもにとって必要な理由は何だと思いますか？

母：・・・

医：ひとつはお勉強、もうひとつは人付き合いだと思います。これを家でやればいいんです。勉強は嫌いなんでしたね。人付き合いはどうでしょう？

母：そうですね…

医：人っていいもんだなって思うことですね。彼はきっと他人は怖いなと思っている。安心できる人を探す。まずは家族。お母さんが毎日毎日「学校行きなさい」ってうるさく言っているとうなるでしょう？

母：・・・

医：ね、まず、お母さんに対する安心感を持ってほしい。お母さんが全人類の代表なんです。

母：今そう思いました。

医：たとえば、「お料理して」と頼む、「今忙しい」、「じゃあ10分したらね」、「うんわかった」って、こういうやり取りが人と付き合う力です。学校の先生ではできなくてもお母さんとならで

きる。コミュニケーションを高めるのは家の仕事を頼むことからと思うんですけど、どうですか？

母：はい…

家でお母さんができることを考えます。お母さんが懸念していた「コミュニケーション能力を高める」のは家でしっかりできることをお話しします。

#### ☆学校との関係

母：あと、学校の先生が先週からきて勉強教えてくれるんですけど、いいですか？

医：彼はどうですか？

母：・・・？

医：親としては学校とのつながりは切らないほうがいい。もしかしたら、彼も勉強をしていれば罪悪感を減らすことが出来るかもしれないし。彼に聞いてみましょう。

コミュニケーション能力を高めるために、こちらで決めるのではなく、まず本人の意向を聞いてみることからであることのお話です。

#### ☆子どもの考えを聞く

ここから母子一緒にお話しします。

医：お母さんは時々学校行きなさいって言う？

子：特に言わない。

医：プレッシャーとかかかかっていない？

子：うん。

医：今くらいでいいですか？ 熱いのと冷たいのはよくない。温かいくらいがいいよね。

子：はい。

医：「学校行ったらどう？」って聞くのはいい？

子：はい。

医：先生が来るのはどう？

子：先生が来て勉強教えてくれるのがいい。

医：そうだよね。これからも、感じたことがあったら言葉で言ってね。

子：うん…

#### ☆家の仕事をしよう

医：私の提案はやっぱり家の仕事をしてほしいんですけど、お母さんのお手伝いをしてほしいです。

子：うん。

医：夕食の準備って手間でしょう？ 野菜とかの下ごしらえって結構大変、1 / 3くらいあなたが切ってあげるとか。

子：わかんない。

医：お母さんが働いているのはどうしてですか？

子：・・・・？

医：おうちにお金がないとご飯も買えないし、服も買えない。だから一所懸命に働いている。きっとお母さんは疲れていると思う。お手伝いするとお母さんは元気になってバリバリ働けるようになる。つらくていやなことかもしれないけど、ちょっとあなたが手伝ってあげると、お母さん元気になって優しくなるかも？これが私の提案です。

学校に行く、行かないは、自分で決めてもよいこと、行かなくても家の仕事をした方がいいことの確認。お母さんと子どもと援助者で目標の一致をとります。

☆今日学んだこと

医：今日学んだことは何ですか？

子：まー、とにかく手伝うことがわかった。

医：お母さんは？

母：私が見本になってあげること。

医：はいありがとうございます。では、次回は2か月後くらいに。

1回目の相談外来で、ここまでお話ができると、かなりいい状態であると言えます。

<その後の様子>

その後、およそ2か月ごとの相談外来で、子どもの様子を聞きながら、心配なことに関してお話を聞き、具体的な場面に沿って、代替案を考えるというやり方で進んでいきます。子どもは、家で体力づくりと家事をし始め、その後、スキーを習い始め、家事も進んでするようになりました。新学期から、週2回学校に行って、校長室で個別に勉強するようになりました。5回目の相談外来で、子どもも元気になり、母も「このペースでやっていきます、大丈夫です」とのことで、相談外来終了となりました。

## VI. その子の強さを見つける

これまで、不登校の相談でたくさんの子どもたちの夢を聞かせてもらってきました。

- 勉強は嫌いだけど、本が大好きな少女。どんな本でも開くと世界が広がるといいます。「図書館司書めざそうよ」、「そう思っていたけど、司書なんてなっても仕事がないと言われた」、「え〜、うちなら大歓迎だよ。うちにボランティアに来ない？あなたの仕事は、毎週10冊の本を図書館から借りてきて、子どもたちに紹介すること」。…ボランティアは実現しなかったけど、その後、元気になって学校に通っています。
- 「寿司職人」が望みの少年、夏休み前だったので、北海道すし屋めぐりを提案しました。知り合いのお寿司屋さんを紹介したところ、そこで「僕は、将来寿司職人になりたい」と自分で話したとのこと。大将が大いに喜び、「今は、寿司職人のなり手がいない、だから大歓迎、いつでも修行にきな、ただしな、高校くらいは出ておけよ」と言われたと笑顔で報告してくれました。

- 保育士になりたかった少女、商業系の高校に入り、資格試験の連続で自分に自信を失ったようす。「保育士になりたいの?」「うん」「じゃあ、目標は保育専門学校に行くことでしょうか?今の高校は頑張りすぎないで、高卒の資格を取ることにだけに割り切ろう」、すっきりした顔で帰っていきました。
- 来たときは、なりたいたいのはないと言っていた少年、慎重派でなにごとにも控えめ、なかなか集団に入っていけないタイプ。ゆったりと相談を続けて、すこし元気になってきたら、「本当は保育士になりたかった。やっぱり保育士になることにする」と決意を語ってくれました。その後学校の配慮で、特別支援学級に移ることができ、毎日登校するようになりました。
- 「何が好き?」という問いに、アイドルの歌を聞いていたいという少女、でも、アイドルになりたいわけではないらしい。あれやこれや尋ねるうちに、ユーチューブでアイドルグループをみていることが分かった。「ひょっとして、キラキラしているのが好き?」「うん」「じゃあ、ネイルアーティストとかは?」と聞くと、「なりたいたいと思ったこともある。でも、今後20年間で無くなる職業って出てたから…」「宝石の勉強をしてみるとか?」結局、メイクアップの講座のある通信制高校へ進学、紆余曲折しながら通っています。
- エリート社員になりたかった少年、地方の中学から市内の高校に来て、「こんなはずじゃなかった」と感じたらしい。「エリートになる夢を捨てなくてもいいと思う。井の中の蛙だったってことね。挫折もエリートになるためのよい経験じゃないかな?」と話していたら、「休学して、高認試験受けます。大学進学を考えています」とすっきりした表情で。

一人一人に一つずつ物語があります。子どもたちのそれぞれの夢、家族みんなで応援できればいいなと思います。

世の中に完ぺきな人はいません。人というものは、弱さと強さとを併せ持つ一個の全体です。不登校の子どもは、単なる弱い子どもでもかわいそうな子どもでもありません。学校は、多数の人と器用に付き合うことが求められ、様々な課題をひとつおこなすことが求められ、できる・できないで評価される傾向が強い場所です。そういう環境の中で、その子の弱さが前面に出て、学校に行きにくい状態になっているだけです。弱さを見つめていても前に進む力は出てきません。自分の価値、強さを見つけた時、人は元気になり、前に歩きはじめます。不登校の子どもを援助するというのは、子どもと親御さんと一緒に、その子の強さを見つける冒険の旅でもあります。

## VII. アドラー心理学の立場から不登校援助を考える

### 1. 学んでもらいたいこと

私たちは親にも子どもにも学んでもらいたいことがあると考えています。

『親に何を学んでもらいたいのか?』というと、「学校に行かないからといって、子どもの人生がだめになるわけじゃない、学校は目的じゃなく手段。学校へ行こうと行くまいと、子どもを大人に育てるために親がしなければならぬことがある」ということです。

『子どもに何を学んでもらいたいのか?』という、「学校に行くことは他者から強制されることではなく、自分が選ぶこと、行かない選択もある。かといってボーっと暮らしてはいけない、学校に行っても、行かなくても、将来は大人になって社会貢献するために働く、そのために今自分のできることを探す必要がある」ということです。

## 2. 子育てを見直す

子どもが不登校になったということは、わが子の子育てを見なおす大きなチャンスです。

- まず、親が親としての姿勢を立て直せるように、
- そのうえで親と子が真の意味で協力しあえる関係を作れるように、
- 最終的に目指すものは、親子が親子として成長するようということなのです。

親子として成長するというのは、

- ①親と子がそれぞれの願いや考えをお互いに理性的に伝えあえること
  - ②それぞれの抱えている課題に、親子で協力して取り組めること
  - ③自分の行動にはいつでも選択肢があるが、選択には責任が伴うことを自覚すること
  - ④一人の人間として、家族内や社会での役割を貢献的に果たせるようになること
- だと思っています。(『パセージ・プラス』テキスト4-Rを改変)<sup>(3)</sup>

アドラー心理学の親子関係プログラム『パセージ』では、子育ての目標を「自立すること」と「社会と調和すること」であると掲げています。そのために、子どもの中に、「自分には能力がある」「人々は仲間だ」という信念を育てること、つまり勇気づけることが必要だといえます。<sup>(4)</sup>

カウンセリングの場は親を勇気づける場でもあり、同時に親に子どもを勇気づける方法を学んでもらう場でもあります。不登校の相談も、具体的な提案は、ほとんど『パセージ』テキストに沿って行っています。

## 3. アドラー心理学の理想

アドラー心理学は、この社会のあり方に対してある理想を持っています。一人一人の子どもが、自立し、社会と調和する大人に育っていった先に、人と人がつながりあい、責任を分担しあい、協力し合って暮らしていく共同体的な社会を理想として想定しています。

『パセージ・プラス』のテキスト12-Lには、以下のように書かれています。

「自立する」というのは「社会に対して責任を持って生きる」ことを意味していますし、「社会と調和する」というのは「社会に対して貢献して生きる」ことを意味しています。つまり、自分一人のためでなく、世のため人のために生きる人に育ってほしいのです。<sup>(5)</sup>

一人一人が、他者に対して関わりを持ち、この社会に対して責任を持とうとすること、そして貢献して暮らそうと考えること、そんな風に大人も子どもも成長していければいいと考えています。

不登校という一見否定的に見える現象をきっかけに、ていねいに話をしていく中で、子どもたちが、自分に自信を持ち、他者に関心を持ち、責任と貢献を果たすように育っていき、ひいては、私たち未来の社会を担ってくれる、すてきな大人たちに育っていったらいいなと願っています。

縁があって、はるこどもクリニックの小児科外来に相談に来られた親と子に、そんなお手伝い  
ができることを願って、日々暮らしています。

## 参考文献

- (1) 文部科学省 (2016) . 不登校児童生徒への支援のあり方 (通知)
- (2) 高柳滋美 (2007) . シンポジウム「もう一度育児を考える」に参加して、アドレリアン、通  
巻52号、P155
- (3) 野田俊作 (2014) . パセージ・プラス、4-R
- (4) 野田俊作 (2000) . パセージ、1-L
- (5) 野田俊作 (2014) . パセージ・プラス、12-L

## 更新履歴

2021年8月20日      アドレリアン掲載号より転載